

薬売り

小川未明

青空文庫

どこからともなく、北国に、奇妙な男が入ってきました。

その男は黄色な袋を下げて、薬を売って歩きました。夏の暑い日に、この男は村から村を歩きましたが、人々は氣味を悪がって、あまり薬を買ったものがありません。

けれど、男は根氣よく、日盛りをかさをかぶって、黄色な袋を下げて、

「あつさあたりに、食べあたり、いろいろな妙薬」といって、呼び歩きました。

子供らは、人さらいがきたといつて、この薬売りがくると怖ろしがって逃げ隠れたりして、だれもそばには寄りつきませんでした。

ある日のこと、太郎は独り圍に出て遊んでいました。遠くの方で、糸車の音が聞こえてきました。海のある方の空が、青くよく晴れ渡って雲の影すらなかつたのです。とんぼが、きゆうりや、すいかの大きな葉の上に止まったり、棒の先に止まったりしているほか、だれも人影がなかつたのです。

このとき、かなたから、薬売りの声が聞こえたのであります。毎日、毎日、こう

して根気よく歩いてても、あまり買う人がないだろうと、村の人々がいっただことを太郎は胸に思い出して、なんとなく、その薬売りが気の毒なような感じがしたのでありました。けれど、また気味悪くも思ったので、隠れようとしましたが、そんな場所がなかったので、きゆうりの垣根の蔭に黙って立っていますと、薬売りの声はだんだん近づいてきたのであります。

その細い、さびしい途は、すぐこの圃のそばを通っていました。どうかして、薬売りの男に自分の姿が発見からなければいいがと、太郎は心で気をもんでいました。

いつしか薬売りは、間近にやってきましたから、太郎は顔を見ないように下を向いていますと、

「坊ちゃん、坊ちゃん。」

不意に、こう呼びかけられたので、太郎は思わず身震いしました。そうしてやつと、顔を上げて、おそろおそろ薬売りのほうを見ますと、かさをかぶった薬売りは途の上に立って、じつとこちらを向いていました。

「坊ちゃん、お願いがあります。」と、薬売りはいいました。

「なあに。」と、太郎は、お願いと聞いて返事をしました。

「のどが渴かわいて、しかたがありませんのですが、この辺へんに水みずはありませんでしょうか。」
と、薬くすり売うりは扇子せんすを指ゆび頭さきでいじりながらいいました。

「ずつと、あつちまでゆかないと井戸いどはありませんよ。」と、太郎たろうは答こたえました。

「そうですか。私わたしは、もうのどが渴かわいて、我慢がまんができなくなりました。まだ、そんなに遠え方んぽうでございますか。」と、薬くすり売うりは、まだなにかいいたそうでありました。

このとき、太郎たろうは、思おもいついて、

「おじさん、すいかをもいであげましょうか。」と聞ききました。

すると、薬くすり売うりは笑えが顔がおになつて、

「私わたしも、それをお願いねがいしようと思おもつたんですが、これは坊ぼっちゃんの家うちの圃はたけですか。」と問といました。

「これは僕ぼくの家うちの圃はたけです。」と、太郎たろうは答こたえました。

「そうですか、そんなら一ついただきたいものです。」と、薬くすり売うりはいいました。

太郎たろうは、いちばん実みのいっただ、水みづ気けのたくさんありそうなのをもぎつて、薬くすり売うりの前まえへ持もつていつて渡わたしました。

薬くすり売うりは、太郎たろうのしんせつに感かんじて、たいへんに喜よろこびました。

「坊ちゃん、あなたのごしんせつは忘れませんよ。ここに私は、たいへんによくきく薬を持っています。この薬は、病気のときや、けがなどをして気を失ったときには、のむとすぐにきく霊薬でございます。たくさんは持つていませんが、ここに二一粒、三粒あります。お礼にこれをさしあげておきます。」と、薬売りはいって、黄色な袋の中から、小さな紙包みになった丸薬を出して、太郎に与えたのであります。

「おじさん、どうもありがとうございます。」といって、太郎は礼を述べました。

「私は、そのうち船がこの港に入ったときに、それに乗ってお国を去りますよ。また、しばらくは、お目にかかりません。来年の夏も再来年の夏も、お国へはこないつもりでございます。坊ちゃんは、お達者で大きくおなりなさい。」といって、薬売りは太郎の頭をなでてくれました。

やがて、この二人は別れたのであります。

二、三日たつと、この港に見慣れない一その黒い船が入ってきました。こんな船はめつたに見ることがないのであります。その船は沖に一日一晩泊まっていました。あくる日は、その影も姿もなかつたのであります。そうしてその日から、村に薬売りがなくなりしました。

太郎は、薬売りのくれた丸薬を、大事にしてしまっておきました。

二

曇った日のことです。太郎は海辺にゆきますと、ちようど波打ちぎわのところ、一羽のやや大きな鳥が落ちて、もだえていました。どうしたのだろうと思つて、近寄つてみますと、わしが血だらけになつて、翼を傷めているのであります。

太郎は、これを見ると、きつとどこかで、わしかなにものかと戦つて傷を受けてきたにちがいない、そうして、ここまで飛んできて、ついに氣力を失つて落ちたのだと思ひましたから、彼は、さつそく家に駆けて歸つて、いつか薬売りからもらいました丸薬を持つてきて、それを死にかかつているわしにのませてやりました。

この間、絶えず波は押し寄せてきて、わしをさらつていこうとしていたのであります。しばらく、じつと太郎はそこに立つて見守つていますと、わしは、しだいに体を動かすはじめました。そのうちに、力強い羽ばたきを二、三度つづけてしますと、生まれ変わったように元氣づいて立ち上がりました。そうして、曇った空に大きく輪を描いて下の荒

波を見下ろしながら、どこへともなく飛び去ってしまったのでありました。

太郎は、いまさら、薬売りのくれた霊薬のききめに驚きました。いったいあの薬売りは、どこからきて、どこへ去ったのだらう。彼は、見慣れない船のきたことや、その船が立った日から、薬売りの見えなくなった、いろいろのことを思つて、しばらくぼんやりと海の上をながめていますと、遠く、いくつとなく船が黒い煙を上げて、いつたりきたりしています。

その夜、海がたいへんに暴れました。波が高く、風が叫びました。雨戸をコトコトと鳴らしました。海辺にある太郎の家は、大風の吹くたびに、ぐらぐらと揺るぐかと思われただけであります。

太郎は夜中に風の音を聞いて眠ることができませんでした。そうして、こんな日に航海する人は、どんなに難儀をしなければならぬだらうと思ひますと、薬売りのじいさんは、いまごろどうしたらうか、もはやどこかの港に着いたであらうか、それとも、また遠い国へいくので、船に乗っているであらうかと、その身の上などが案じられたのであります。

このとき、まくらもとの雨戸をたたくような音がしました。太郎は、きつと海の方から

強く吹きつける風の音だろうと思つていました。すると、つづいて羽ばたきする音が聞こえました。

「きつと、風のために、海鳥がねぐらを取られて騒いでいるのだろう。」と思ひました。その羽ばたきが、あまりたびたび聞こえましたので、なんであろうと、太郎は起きて、兩戸を開けて外を見ますと、空は真つ暗で星の光ひとつ見えずに、波が高く騒いでいました。

そのとき、不意に、一羽の鳥が窓からへやの中に飛び込みました。それは、いつか命を助けてやったわしでありました。わしは一つの袋をくわえていました。そして、畳の上で落とすと、また暗の中に飛び込んで、どこへともなく立ち去つて、姿をくらましたのであります。

太郎は、わしが落としていった袋を拾い上げてみますと、それは黄色な小さな袋であつた。薬売りの持つていた大きな袋の形によく似ていました。ともすると、この袋も薬売りが持つていたのかもわかりませんでした。

袋を開けてみますと、その中には小さな遠眼鏡が入つていました。これこそ、じつにどんな鳥の目よりも敏い不思議な眼鏡であつて、まったく、わしがいつか命を救つてもら

つたお札れいに太郎たろうに持つてきてくれたものだとわかりました。

夜よが明あけると、風かぜは止やまりましたけれど、沖おきの上うえには黒雲くろくもが垂たれ下さがって、ゆく船ふねの影かげが見みえませんでした。

太郎たろうは浜辺はまべに立たつて、わしのくれた遠眼鏡とおめがねで沖おきの方ほうをながめると、ちようど、わしの瞳ひとみのようにその眼鏡めがねは、幾百里いくりも遠とおい遠とおい海原うなばらの景色けしきが、その中なかに映うつるのであります。

その方ほうは波なみが穏おだやかで、太陽たいようが静しずかに大空おおぞらに燃もえていました。空そらは、青あおく、青あおく晴はれて、海鳥うみどりが飛とんでいるのも見みえました。そうして幾いくそうかの船ふねが黒い煙くろけむりを上げ、ゆうゆうとして波なみの上うえを航海こうかいしていました。太郎たろうは、遠目鏡とおめがねで、薬売りくすりうの乗のつていた船ふねは見みえないかと、いろいろに探さがしました。

すると、いちばん遠とおくゆく船ふねがあります。つぎに、それよりやや後おくれて形かたちの変かわつた船ふねがあります。もしや、それでないかと、じつと眼鏡めがねをその船ふねの上うえに向けて子細しさいに見みますと、いつかこの港みなとに入はいった、彼かの見慣みなれない船ふねでありました。

薬売りくすりうは、どうしたかと、太郎たろうは、なお船ふねの中なかを探さがしますと、甲板かんばんの上うえに、薬売りくすりうは、知らぬ商あきんど人ひととなにやら笑わらいながら、煙草たばこを喫すつて話はなしをしていました。商あきんど人は、

顔かおの色いろのおそろしく黒くろい男おとこでありました。

そうして、箱はこの中なかから、さんごや、真珠しんじゆや、めのうや、水すい晶しようや、その他た、いろいろと高価こうかな、美うつくしい宝ほう石せきを出だして、薬くすり売りに示しめしておりました。

太郎たろうはいつまでも、その船ふねを見送みおくっていますと、船ふねはだんだん、知しらぬ遠とおい遠とおい国くにの方ほうへ小ちいさくなつていつてしまったのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二 講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

※表題は底本では、「葉《くすり》売《う》り」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年10月01日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

薬売り

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>